CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
Provided by Kwansei Gakuin University Repository

二重の「テキスト」として *Life on the Mississippi* を読む

——「川のガイドブック」兼「〈旅行記〉読解ガイド」——

平　田　美千子

は　じ　め　に

Life on the Mississippi（1883）は，マーク・トウェインによる四番目の旅行記と一般に見なされている。「アトランティック・マンスリー」誌で“The Old Times on the Mississippi”（1875）として連載された第四章から第十七章までの部分と，その後書き足された第十八章から第二十一章は，筆者の水先案内見習い時代の自伝的回想録である。厳密にいうと，旅行記の体裁を認めることができるのは，1882 年のミシシッピ川取材旅行後に加えられた，ふつう後半部と呼ばれる第二十二章以降の部分に限られる。その内容は川の歴史，地理的データ，船上あるいは沿岸の人々や沿岸都市のスケッチ，脱線的挿話，子供時代の思い出話，南部文化論と多岐にわたっている。この後半部に関しては，外国人旅行者の旅行記や新聞記事や関係書物などからの引用，単調なデータ報告的記述，一見本筋とは無関係に見える挿話などが多用されているという特徴が指摘されている。そのため，契約の条件を満たすための，あるいは書く内容に詰まったときの埋め合わせと批判される傾向がある。とくに最後の数章は，批判の妥当性にかかわらず，「せいぜい本筋にちょっと関係しただけの逸話で，とりわけいびつな構成になっている。長い引用とつまらない統計的報告だ」（Bridgman 106）との酷評も，しかたがないと考える読者が多いのでは

ないだろうか。

ただし，この手の批判には反論の声もみられ，しかもそれなりの説得力を備えていることにも注目をしておかなければならない。たとえば，Horst H. Kruse は，トウェインの書簡を丁寧に調べ，作品執筆の背景を詳細に分析し，一見やっつけ仕事のように見える先にあげたような特徴は，むしろ「慎重に考え抜かれた計画によるもので，それ自体十分に注目に値する」（Kruse 130）として擁護している。カール・リッターの話も，筏乗りのエピソードも，外国人旅行者のエッセイからの長い引用も，すべてこの本の目的に適った必要欠くべからざる要素というわけである。Kruse に言わせると，トウェインが目指したという「定評ある著作」（“standard work”）とは，関連書物や歴史的事実，じっさいの取材をもとにし，客観的視点でテーマを掘りさげる，広く読まれるだけの普遍的性質を有する作品となる。（cf. Kruse 9）つまり，川についての必要な情報がきちんと盛り込まれた，誰にでも読みやすい「ミシシッピ川のガイドブック」を作ろうという意気込みのもとに執筆されたというのだ。そして，この目的のために「トウェインは，この本の最後の四分の一を執筆するのにひどく苦労をすることになった。……テキストの内容の統一性の欠如が問題だったのだ」（Kruse 100）とも述べている。また，トウェインはミシシッピ川の歴史を書こうとしたのであり，「自らをなじみの題材に関して広く読まれるべき権威として位置づけている。単に予約購読本の体裁を整えるために原稿を埋めているのではないのだ。……この作品を仕上げるのにトウェインが直面した困難とは，書く内容に行き詰まったことではなく，それをどうまとめるかであった」（Howe 7）との意見もある。

いずれにしても，ここで指摘しておきたいのは，たとえ関連文献からの引用や挿話，地理的データ報告などが目立つために，前半部に比べ，語りの勢いや調子に衰えが多少感じられたとしても，当時のアメリカ一般民衆や社会の物事に対する鋭い洞察は，後半部の大きな魅力となっている，ということである。そして，以下本稿において話題の中心となるのもこの後半部で，一般に作品の悪しき点として見なされる後半部の諸要素の中に，*Life on the Mississippi* の

性格を決定づけるカギが隠されているものと考える。前半部の，蒸気船の水先案内修行のさいの「川の水面の本を読む」エピソードは，後半部のためのいわば伏線となっている，とあらかじめ述べておこう。

ミシシッピ川を題材にした「川のガイドブック」という従来の捉え方を踏まえたうえで，*Life on the Mississippi* の持つもうひとつの側面に焦点を当ててみようというのが本稿のねらいである。

I

後半部に関しては旅行記の体裁を認めることができるとさきに述べたが，旅行記というものが事実をもとにした著述であるとしても，そこに一個人の書くという行為が介入する以上，旅行記はフィクションであると見ることもできる。とすれば，自伝とされる前半部にも同じことがいえるはずである。したがって，Lafcadio Hearn や Marilyn Lancaster が *Life on the Mississippi* を小説と評している（cf. Hearn 102；Lancaster 188）ことにもさほど抵抗なくうなずくことができるだろう。Earl F. Briden は，*Life on the Mississippi* に登場する人物の語りだけでなく，作品それ自体も前・後半部ともにフィクションであることの証明を詳細にわたっておこなっている。筆者個人の印象や意見のみならず，一見客観的に見える語りも，結局，相対的なものでしかなく，良心の呵責，痛恨，罪悪感，ひいき，思い入れ，世間の評判，社会的価値観等々によって影響されるのは必然で，それは歴史家の記述する歴史また科学，法律の各著述においても同じことだと指摘する。さらにはトウェインが目指した客観的な記述を基本とした普遍的性質を持つ「定評ある著作」など，その意味では，結局，不可能な試みでしかないとの厳しい見方をしている。（cf. Briden）

Life on the Mississippi の虚構性に関する詳しい分析はほかの批評家にまかせるとして，ここではわかりやすい例を挙げるにとどめておく。たとえば“The Old Times on the Mississippi”において，師匠は，その技術の驚くべき高さ

と正確さ，威厳と自信，訓練の手順の巧妙さから，まるで初老の熟練水先案内，また，見習いは，その職に対する純真な憧れ，なりふり構わぬ身の入れよう，素直で無垢なとぼけた性格から，まるで少年のように描かれている。この部分の人物描写は，じっさいはビクスビィが三十五歳，トウェインが二十一，二歳ということを考えてみれば，明らかに脚色されたものだといえよう。また，ペンネーム「マーク・トウェイン」の起源を話題にした第五十章では，トウェインは，「アイゼイア・セラーズ船長」が「ニューオーリンズ・ピカユーン」誌の記事を執筆するさいにもちいたペンネームを借用した，と説明しているが（cf. *Life on the Mississippi* 496–8；以後 *LM* と略記する），じっさいには，この雑誌にこのペンネームで書かれた記事は存在しないことが分かっている（cf. Fatout； Cardwell）。そのため，この話はトウェインによるフィクションだという結論に落ち着いているようである。

このように，*Life on the Mississippi* の読者は，作品の事実性も虚構性も同時に視野に入れて読むことを要求されているのである。

II

知っての通り，トウェインは，当時広く読まれていた数々の旅行記と，それに捕らわれて行動してしまう旅行者たちを徹底的に風刺した *The Innocents Abroad* 以来，記事を執筆するさいの特徴ともなっている客観的視点をもちいてきた。事物を観察しそれを叙述するときに，余計な脚色を徹底的に排除し，できる限りありのままの現実を伝えようとする，記者的姿勢といえよう。その結果，「力強く引きしまり，簡明直截，よけいな飾りのない文体」（*LM* 459）が生まれてきたとしたら納得できるはずである。この「新聞雑誌記者流報告の率直性と明快さ」（Cox 11）をみるには，川沿いの街に関するエッセイや，南北戦争中の人々の悲惨な状況を描いた場面（*LM* Chapter 35）を挙げるのがいいだろう。とりわけ，蒸気船ペンシルバニア号に起きた爆発事故の惨状が語られるとき，その最たるものを目にすることができる。その事故で弟のヘンリ

ーが重傷を負い，数日後，死に至る様子を描くときでさえ，記者的語りの調子が崩れることはない（cf. *LM* 243）。冷徹ともいうべき調子で「真実の探索，そして事実を余すところなく提供する記者の責務」（Fishkin 61）が遂行されている。トウェインは，事故の惨劇をむしろ静かな調子で描くことによって，まるで読者の眼前で展開するかのように，全体像を再現することに成功しているのである。

トウェインが記者的姿勢による著述を積極的に取り入れたのは，こうした迫真の表現力ばかりではなく，読者に判断を委ねる，というこの文章の性格をよく理解していたためであろう。新聞や雑誌などメディアの目標のひとつは，書く側が特定の立場を表明することにあるのではなく，読む側にできるだけ公平な情報をあたえ，それをどう判断するかは読者次第，とすることにある。その完璧な実践は，本論の第一章での議論を見ても分かるように，不可能にちがいないのだが，それに近づけるように心がけることはできるはずである。

Life on the Mississippi の執筆にあたって「定評ある著作」を目指したトウェインは，こうした記者流の客観的視点に立った記述と，筆者の個人的印象や意見を述べた，いわば主観による記述を明確に区別し，読者に自身の目を意識させ，読者の視点が偏ったものにならないように配慮する姿勢を示してみせる。トウェイン自身の印象を語るとき，「南部人は音楽的に話す。少なくともわたしには音楽に聞こえる。とまれわたしは南部生まれなのだ」（*LM* 448–9）とわざわざことわったりする箇所は，わかりやすい例だろう。*The Innocents Abroad* の冒頭に，この作品において，トウェインの「目的とするところは，ヨーロッパや東洋をすでに旅したことがある先人の眼を借りずに，それらを自分自身の眼でみたら，そのひとにはどんな風に映るのかということを読者にそれとなく示すことにある」（*The Innocents Abroad* v）というくだりがあるが，この点を *Life on the Mississippi* でも実践してみせるのである。

そこで，まず，トウェイン自身のミシシッピ川に対する個人的印象を感傷たっぷりに披露しておいて（cf. *LM* 292），一転，客観的視点に立ちかえり，外国人旅行者による川の率直な印象を紹介し始める。そこでこう説明を加えるの

である。「これ［ミシシッピ川］を見て外国人のこころに生まれた感動は，むろん全部が全部同じひな型によるわけではない」（*LM* 292–3）。他の作家の印象，所見，価値観のバラエティを引き合いに出すことで，物事を見る目はひとによってずいぶん違ってくること，外国人旅行者の見方が（トウェイン自身の見方でさえも）絶対ではないことを読者に示すのである。

Gretchen M. Beidler は，*Life on the Mississippi* と *Adventures of Huckleberry Finn*（1885）をどちらも旅行談としてとらえ，その相関性をとりあげた論文で，川沿いのアメリカ社会・文化に対するトロロープ夫人とバジル・ホール船長の所見と，ハックルベリィ・フィンの考えをそれぞれ丁寧に分析し，トウェインの目的は，どの観察者のものが正しいと主張することではなく，見る人によってそれぞれの真実があることを示すことにあると論じている。「彼らはそれぞれにとっての真実を率直に記したのだ。旅行者による所見を議論する場合には，その〈主観性〉――たえずトウェインが読者に注意を促すものだが――を常に考慮にいれておかなければならない」（Beidler 159）。*Life on the Mississippi* で紹介される外国人旅行者の見たアメリカとハックの見たアメリカは，いずれもそれぞれの社会的，文化的そして個人的状況からの見方でしかない，ということになる。

ひとのものの見方にはこれと決まったもの，つまり絶対はなく，一定の関係や状況においてだけ妥当性を有するもの，すなわち相対でしかあり得ない。このことは，イギリスのヴィクトリア朝時代の作家，ディケンズの蒸気船に関する印象と，川沿いに住むアメリカの一般の人々の印象の対比がなされるとき，いっそうはっきりする。

> ディケンズ氏が蒸気船を英王室の戴冠宝器やタージマハルやマッターホルン，その他彼が見た値のつけようもないみごとなものと比べていたのなら――おっしゃるとおり，蒸気船は壮麗じゃない。一般庶民も自分たちがかつて見たものと比べる。そのうえで判断して蒸気船は壮麗だと言う――正しい形容だし大げさすぎもしない。ディケンズ氏と同じく正しい。蒸気船

は陸上のなにものにもましてすばらしい。流域に建つ豪邸や高級ホテルと比べても，文句なしに壮麗で，〈宮殿〉なのである。（*LM* 399）

川沿いに住みそこから外の世界を知らない人々にとっては，蒸気船はまさに「壮麗な」「宮殿」に見えるが，蒸気船よりも壮大なものを見聞したことのあるディケンズには，もはや彼らと同じように蒸気船を「なににもましてすばらしい」と評価することはできない。「蒸気船が表象する〈ロマンス〉は，再構成された記憶からみれば，真実であると同時に虚偽でもある。比較の対象となるものがなにもない川沿いの民衆には，うそいつわりのないことだし，その模造と虚飾のわざとらしさに気づいてしまう分別を持った目にはいんちき」（Cox 117–8）でしかないのである。「壮大さや豪華さなどというものはあくまでも相対的なものである。トウェインはあきらかに美意識の相対性という概念の問題をとりあげているのである」（Kruse 47）。ここでもまた，書く人の文化・社会的背景や書かれた時代によって，視点は当然異なることをあらためて認識させられるのである。ひとの所見というものは常に主観的であり，「あくまでもひとつの捉え方」（Beidler 159）としてみるべし，というわけだ。（cf. Beidler 161）

III

Life on the Mississippi において，トウェインは読者側の視点に積極的に働きかけ，しきりに次の二点について注意をうながす。まず，第二章で論じたように，自分のものも含めてひとのものの見方というものは結局，相対にすぎないということ。つぎに，それを認識した上で，物事を客観視しようという姿勢を保つことが強調されている。つまり，ある対象を一歩離れたところから観察し，自分の観た現実をもとにその対象を検討するように努めよ，というすすめである。

ここで，名高いウォルター・スコット批判が登場する。それまで穏やかだっ

た語りの調子がおもむろに厳しくなり，突然嫌悪と非難に満ちた批判が繰り広げられる。トウェインの批判たるや行き過ぎではないか，と危惧するくらい情け容赦ないものなのだが，そこまで批判するのは，スコット流ロマンティシズムのせいで人間が非人道的にも不合理的にもなってしまうという弊害を自らの人生を通じて体験していたからだろう。

トウェインによると，南部の根強いロマンティシズムはスコットに由来し，スコットが南部人にいたずらに植え付けたロマン主義的騎士道精神のせいで，殺人――決闘という忌々しい習慣――が正義や美徳としてまかり通ってきた。ここでいうスコット流ロマンティシズムとは，一般にロマンティシズムの特徴として挙げられる二つの側面，〈1. 個人の感情・空想・主観・個性などを積極的に自由に表現しようという，十九世紀以来の西欧ロマン主義，2. 夢や空想の世界にあこがれ，現実を逃避し，甘い情緒や感傷を好む傾向〉のうち，2の側面が前面に出てしまったロマンティシズムをいう。この感傷主義ともいうべきロマンティシズムの熱に浮かされて，現実と架空の世界との区別がつかなくなり，冷静な人道的判断までも見失われるようになってしまったというのである。そのうえ，ロマンティシズムに侵された南部の宗教や政治形態，雄々しさ，派手さ，騎士道精神，貴族意識にともなう階級意識，高慢といった要素が寄り集まって南部に定着してしまったがゆえに，南部は南北戦争をひきおこすにいたったのだと述べる。（cf. *LM* 467–9）さらに，南部の文明的，文学的後進性も，スコット流ロマンティシズムが元区なのだと言い切ってしまう。

ここで注意をしなければならないことは，トウェインがロマンティシズムそのものを全面否定しているわけではないということだ。前述の二つの側面のうち，1の価値に関してはおおいに認めている。“Old Times on the Mississippi”全体の調子はいうに及ばず，一般にルポタージュと評される後半部においても，トウェイン流ロマンティシズムがちらほらと顔を覗かせることからもそれが分かる。たとえば，子供時代の体験談やハンニバルを再訪したとき，旅行中の川沿いの風景――特にミシシッピ川の夕暮れや夏の夜明け――を眺めるときに，どっぷりとロマンスに浸ってみせている。個人の情緒を自由に語っ

たり味わうことには，むしろ積極的といっていいほど肯定の姿勢をみせているのである。トウェインの非難の対象となるのは，自分で物事を判断せずに，書物や世間の因習や偏見に左右され，盲目的信仰に陥ってしまう状況を作り出すスコット流ロマンティシズムであり，それによって不合理な問題や結果が生み出されたり，それらを世間にまかり通らせている社会や人々の態度を批判しているのである。

スコット流ロマンティシズムをこきおろすだけにおさまらず，トウェインは，いかにもうさんくさい，盲目的南部賞賛に満ち満ちた「ケンタッキーの〈女子大学〉の学園案内の抜粋」（*LM* 417）を槍玉にあげる。「南部人こそ，この大陸における最高の文明人との信念にのっとり……」（*LM* 418–9）という文言に対して，二ページにわたる長い原注をつけて，南部で起こった野蛮で非道な流血事件に関する新聞記事を四つも紹介し，「最高の文明人」と自らを謳い，ロマンスや騎士道精神に彩られた見せかけの南部的正義や美徳の傍らで，いかに殺人や決闘といったものが南部では横行しているかを明らかにするのである。

また，これら南部の野蛮な事件の多くに関わった当事者の例として，悪名高きジェシー・ジェイムズやマレル一味のエピソードを引きあいに出す。ジェイムズにしろ，マレルにしろ，いつの間にか民衆の間では英雄視される存在になっていた。「事実の解釈の仕方など，社会状況が生みだす評判によっていくらでも改変可能である」（Briden 233），「社会というものは，自らの歴史的テキストをうまい具合に書き換えるものだ。つまり，公衆が尊敬する対象などは，社会の意思次第でどうにもなるものなのだ」（Briden 234）といった指摘の具体例といえる。しかも，トウェイン自身も大悪党マレルについてはある種の尊敬をこめて描いているように思われる（cf. *LM* 312）。けれども，トウェインが第二十九章で持ち出すエピソードをじっさいに読んでみれば，ここでの目的が，人々のもてはやす英雄の実態は，人の命を何とも思わない冷酷無比なならず者であるということを読者に示すことにある，と読みとれるはずだ。読者自身が世の中の物事をできるだけ客観的に落ち着いて観察し，ロマンスと現実の

違いを冷静に見わけるよう促しているのである。

さらにトウェインは，南部に限らずおそらく当時のアメリカ社会のいたるところで目についた，不合理としかいいようのない感傷主義について手厳しい批判を展開し，繰り返しその悪性に警鐘を鳴らす。「地上の廟所」（*LM* 430）の出現とその前後のいきさつを説明したあと，衛生という実際的な面からいえば，火葬は合理的だという意見を述べる。「貧しい者にとっては，火葬のほうが土葬よりもよいはずだ。なにしろ安上がりだから――貧しい者がいずれ金持ちのまねをしだすまではとりあえず」（*LM* 435）。第四十三章の最後に「わたし自身は火葬にしてもらいたいと望んでいる。……家族全員がこぞって反対だった」（*LM* 441）とあるが，これはトウェインの周囲の人々だけに限ったことではなかったのだろう。大多数の一般民衆にとって，長い伝統をもつ土葬という埋葬法は，絶対的に強固なもので，火葬という新しい埋葬法をすんなりと受け入れるなど，とうてい考えられないことだったに違いない。その拒絶の理由は何ら合理的なものではなく，ただ目の前の愛する者の身体が消滅するなんてとんでもない，という体のものである。第四十三章に登場する葬儀屋のエピソードで描かれた，葬儀屋は損をすることがない，という真理は，死に直面したときの人間に共通する「論理拒絶の価値観」（Briden 233）を如実に物語るものにほかならない。（cf. *LM* 437–8；440）トウェインは，そこに働く不合理な見栄と自己満足とを容赦なく批判するのである。

このような世間の不合理な感傷主義の最たる例を示して見せたのが，第五十二章のエピソードである。これ見よがしの感傷に訴えた話題にどうしようもなく弱い人々が，「強盗にしてハーバードの卒業者にして聖職者の息子――才人悪党ウィリアムズによる完全なでっちあげ」（*LM* 522）にまんまとだまされるさまを皮肉たっぷりに描き（cf. *LM* 517–8），ロマンスや感傷に訴えた話題に盲目的に浸りがちな風潮のために，ペテンや詐欺さえ信じこんでしまう世間の安易さを風刺してみせる。

このように，「トウェインの作品において中心的テーマとなる人間一般の弱点とは，直解主義，つまりテキストの表面的な意味をなんの疑問もなくそのま

ま受け入れてしまう傾向」（Fishkin 58–9）であるといえよう。この「人間一般の弱点」は，ペテンや詐欺，金儲け主義――これらの例は *Life on the Mississippi* のテキストのいたるところに転がっている。第三十六章に登場するギャンブラーやペテン師，第三十九章の偽バターと偽オリーブオイル販売者，第四十八章の交霊術や霊媒者――に満ちた当世の，すべての諸悪の根源ともなりかねない。そこで「自分たちを取り巻くさまざまな虚偽を見抜けるように，読者を導くことがトウェインの作品の目指すところ」（Fishkin 57）となるのである。

お　わ　り　に

トウェインの生きた時代は，鉄道や船舶などの交通手段の進歩がひとびとの土地観やものの見方に大きな影響を及ぼし，その結果が世界的に定着するまでの過渡期であった，といえるだろう。交通手段の飛躍的進歩に伴い，帝国主義諸国による植民地政策や観光事業も急激に促進され，ついには一般の人々が，時間と費用さえ許せば，世界の各所を気軽に訪れることができるようになった。しかし，この時代に誕生し，現代では，世界的な広がりを見せる，短時間で名所旧跡を訪問，観察し，その印象を楽しむ観光という旅のスタイルは，ひとびとの物事の見方をより安直で軽薄なものに向かわせてしまう傾向を生みだした。そのような社会状況のなかで，旅行記もまた，その需要と供給がともに増え，量産され，一定の形式を獲得し，その結果，既存の文化観や偏見の押しつけや「直解主義」という問題をはらむことになったといえよう。（cf. Yamashita）そうした現状を黙視することができなかったトウェインは，*Life on the Mississippi* という場を利用しないではいられなかったようである。

トウェインの作品では，多かれ少なかれ，民衆への教訓的要素がどこかに顔を覗かせている。トウェインという作家には，たぶんに説教好きの気質があるのだろう。この作家にとって旅行記は，筋という枠組みがないだけに，自己流の教訓をより自由にすべりこませることのできる場であった。*Life on the*

Mississippi において，トウェインは，立場の違いによってものの見方が異なることを認識し，そのうえで世間に溢れているテキスト――噂，世評，一般論，因習なども含めて――をそのまま受け入れずに，まず，じっくり自分の眼で観察し検討する姿勢をすすめる。相対性を認識し，客観的視点を持つべし，との教訓をひとびとに教授するのである。トウェインはこの作品を「定評ある著作」にしたいと考えていた。その意味で，*Life on the Mississippi* は「ミシシッピ川のガイドブック」兼「〈旅行記〉の読み方ガイド」という，二重の意味を併せ持ったテキストであるといえるにちがいない。

そう考えると，*Life on the Mississippi* 前半部，蒸気船水先案内の修行の場面で「水先案内たちが川にじっと目をこらし，まるで川が本でそれを読んでいるみたい」（*LM* 112）と描写をしてから，川の水面を，そこに表されていることの意味を正確に読みとるべき本にみたて，「やがて水の面はすばらしい本となった」（*LM* 118）と語るところは，この作品，*Life on the Mississippi* の特徴をみごとに集約した部分といえよう。川の水面の穏やかさやきれいさだけに目をやるのではなく，その背後に，それが現実に意味するところを読みとること。テキストのなかでトウェイン自身は「〈水を読む〉レッスン」（*LM* 112）を受け，いっぽう読者は旅行記，ひいては世間の事物の意味を読みとるレッスンを受けることになるが，その点はまさに仕掛け人トウェインに脱帽，といわざるをえない。

Works Cited

Beidler, Gretchen M. “Huck Finn as Tourist: Mark Twain's Parody Travelogue.” *Studies in American Fiction* 20（1992）：155–67.

Brazil, John R. “Perception and Structure in Mark Twain's Art and Mind: *Life on the Mississippi*.” *The Mississippi Quarterly* 34（1981）：91–112.

Briden, Earl F. “Through a Glass Eye, Darkly: The Skeptic Design of *Life on the Mississippi*.” *The Mississippi Quarterly* 48（1995）：225–37.

Bridgman, Richard. *Traveling in Mark Twain*. Berkely: U of California P, 1987.

Cardwell, Guy A. “Samuel Clemens' Magical Pseudonym.” *The New England Quarterly* 48（1973）：175–93.

Cox, James M. *Mark Twain: The Fate of Humor*. Princeton: Princeton UP, 1966.

Fatout, Paul. "Mark Twain's Nom de Plume." *American Literature* 34 (1962), 1–7.

Fishkin, Shelley Fisher. *From Fact to Fiction: Journalism and Imaginative Writing in America*. New York: Oxford UP, 1985.

Hearn, Lafcadio. Rev. of *Life on the Mississippi*, by Mark Twain. *Times Democrat* (New Orleans) 30 May 1883: 4. Rpt. in Hutchinson, Stuart ed., *Mark Twain Critical Assessments Vol. 2: Contemporary Reviews; Creative Writer's Responses*. Mountfield, Eng.: Helm Information, 1993. 101–03.

Howe, Lawrence. Afterword. *Life on the Mississippi*. By Mark Twain. Fishkin, *Life on the Mississippi* xxxi–lii.

Kruse, Horst H. *Mark Twain and "Life on the Mississippi*."Amherst: U of Massachusetts P, 1981.

Lancaster, Marilyn. "Twain's Search for Reality in *Life on the Mississippi*." *The Midwest Quarterly* XXXIII (1992): 210–21. Rpt. in Hutchinson, Stuart, ed., *Mark Twain Critical Assessments Vol. 3: Critical Essays*. Mountfield, Eng.: Helm Information, 1993. 187–94.

Twain, Mark. *The Innocents Abroad*. 1869. Ed. Shelley Fisher Fishkin. The Oxford Mark Twain. New York: Oxford UP, 1996. (マーク・トウェイン『地中海遊覧記（上）』，吉岡栄一・錦織裕之訳，マーク・トウェインコレクション⑩－A，東京：彩流社，1997)

————. *Life on the Mississippi*. 1883. Ed. Shelley Fisher Fishkin. The Oxford Mark Twain. New York: Oxford UP, 1996. (マーク・トウェイン『ミシシッピの生活（上）』，吉田映子訳，マーク・トウェインコレクション 2–A，東京：彩流社，1994；マーク・トウェイン『ミシシッピの生活（下）』，吉田映子訳，マーク・トウェインコレクション 2–B，東京：彩流社，1994)

Yamashita, Shinji, ed (山下晋司編). 『観光人類学』，東京：新曜社，1996.

——大学院文学研究科博士課程後期課程——